

他に精神的なやり切れなさを救う手段も多いはず、でも悪妻共は、世間知らず、ぶきっちょで「欲しがりません勝つ迄は」と育てられたので、例えばボーリングでどぶさらいなんで無益だし、第一お金が勿体ないと思ってしまう。こうした一点非の打ち所のない悪妻の正論を裁判所で聞かされると、同じ仲間の一人として全くため息が出てしまう。私達はめぐり合せが悪いのです。でも悪妻はひつくり返せば良妻なんだと自らをなくさめている。事実、私に悪妻の年代と云う言葉を教えてくれた夫婦は、その後、そう実感して仲良くなった上、事件を取下げた。 (4回生)

日 記 か ら

松 岡 恵 美 子

1月〇日

「君の羨しが話がある」と主人が言う。私は主婦で外国旅行でもしてきた人があるのかしら、と思った。ところが知人のIさんの奥さんは大学卒業後すぐ結婚したが、最近子供の手が離れたので高校講師になったそうである。しかしお宅の奥さんと違って経験(教職)がないので、毎日その準備でフーフー言っているが、とてもはりきって楽しそうだとのことである。たしかに私は五年也の教職経験があるが、長男誕生とともに退職、七年間のブランクは経験を張消しにしているような気がする。GNP第二位、米が余るなどというのは、七年前には考えもしなかったことである。

1月△日

近く二才になろうとする次男をお風呂から出していると、長男が「名古屋のMさんから電話！」と言う。Mさんは小学二年と四才のお子さんをかゝえて、ずっと共働き中である。現在はお姑さんがいらして元気に共働き中であるから安心して下さいとのこと。二年すると下の子が幼稚園に入る時をめざして教職に復帰すべくがんばりますと軒並に年賀状を出したので、Mさんも電話下さったらしいが、今年も一カ月ははやすぎるといのに、毎日の家事に追まわられて勉強も何もしないですぎてしまった。主婦が仕事に復帰するには二年の準備期間が必要というが、こんなことではすぐ二年がすぎてしまう。

二月×日

「朝仕事の時間調べ」を三日間するように最寄でいわれる。職をやめてからつまらないと文句ばかり言っていた私が、五年半ほど前から雑誌婦人之友の読者の会である東京友の会に入会して、週一・二回子供連れで会合に出席するようになって、家庭に落ち着くのに文句を言わなくなったと自分でも思う。最寄は友の会の最小単位である。家事のベテランになることは主婦専業である以上必要

である。衣食住家計等家事について友の会は実に綿密に勉強させてくれる。家計は予算生活、食は栄養のバランスのとれた食事をすべく一週間人参何g、牛肉何gと摂取した食事をすべて記録したりする。「朝仕事の時間調べ」とは起床後衣食住それぞれにかかった時間を記録するのである。朝仕事なんていうのはただらしてあるとすぐお昼になってしまう。洗たく60分、掃除60分、朝食関係30分、その他で計200分という自分の持時間を知っていると、外出などの時、手をぬく箇所もわかる。と言っても次男が午前中に三回も大便したりすると、すっかり予定もくるってしまうが、午前中に1~2時間の時間を作りうることを知った。この時間にブランクをうずめるべく努力しよう。

二月〇日

「次男のわん白坊主」の名にふさわしく、次男はいたずらっ子である。長男が宿題をしようとする、先に椅子にすわって鉛筆で机の上にメチャ書きし、ピアノの練習というと先にピアノの前にすわっているすばやさで、長男は階段をはずした二段ベッドの上で宿題をやっとする始末で、長男の勉強の様子も殆んでみてやれない。外に出かける時、歩かせると、時間がかかって、又ころんでどろんこ、帰りはダックとなったり、デパートではぐれたり、最近はおっぱらオンブする。ママコートの下から足がぬっと出て、背中に12Kg、両手の荷物が合計7Kg、坂道をえっちらおっちら、家路を急ぐ。長男は一時半には帰宅する。その時、家が締っていると友だちと遊んでいるのはよいのだが、何となく統制がとれない。長男の下校時、家にいて何とか言ってやると、それから矢のように遊びに出かけてもしまりがつく。このいたずらっ子たちは、祖父母からも二・三時間位はみてもらえても、それ以上はもて余される。主婦専業となると、いや応なく子供べったりの生活で、共働きの人が朝晩だけ子供に接するのは、どんなにか新鮮な気持で接することができてよかろうと思う。でも我家では誰れも子供をみってくれる人がいない。もう少し皆が私をありがたがってくればよいのだが、皆、当然と心得て、何とも思っていない。中・高・大と三人の男の子さんのいる奥さんはいつも「私は下宿のおばさん以下だ。」という。我家も近い将来そうなりそうだ。私の人格を認めさせ、男族の僕とならぬためには、「お母さんも仕事をもっている」ということかも知れない。

2月△日

家事の合理化、簡素化が叫ばれて、インスタント食品、家庭の電化は進んだが、主婦の家事時間はふえる傾向にあるという。便利になってみなが手伝わなくなったのも原因とかいう。食品公害云と騒がれれば、手作りで栄養のバランスのとれた食事という手間がかかる。洗濯機だけでは汚れ物はきれいにならない等々、主婦の仕事は際限ないが、手のぬけるところ、家族に手伝ってもらえる所は協力してもらって時間をつくり、今年は一時間(一日)、来年は二時間という具合に少しずつ

つても、勉強し、職場復帰したいと望んでいる。

(5回生)

いけばなと私

鈴木友子

私が自分でも思いがけず、他人様にいけばなの手ほどきをするようになってそろそろ十年たとうとしています。高一の時からはじめたいけばな、そしてたゞ趣味として楽しんできたものが、その後の自分の中でこんなにも大きな部分を占めるようになって我ながら驚いております。そしてこれまでに成ったのは本当に先生方や皆様の暖いお励ましによるものであることを思い、月並の言葉ながら、深い感謝の念で一杯です。

自宅で教えたり出稽古をしたりしますが、この約十年間私の中心となっていますのは作楽会のいけばな教室です。作楽会というのは附属高校の同窓会で、桜蔭会館のお隣りです。そこでは、草月会の田口是庭先生が主に指導しておられます。大学生から還暦すぎの方まで、時には外人の方の飛入のお稽古まであります。

何と言ってもやりがいのあるのが年一回の展覧会、勉強会でしょうか。たった一日か二日、約五十点の作品を見ていただくだけでも、半年位前から準備に入ります。そして一回毎の会のことが、いけばな教室の足跡であり、そのまま私の年輪です。会の運営にはこの頃慣れてきましたが、段々苦しさを増すのが自分の作品です。

昨年はじめて鉄の作品をつくり、それに「憧」という題をつけ、現在横浜のさる所に飾ってあります。いわゆる生の花のいけばな、石骨を使った年、白樺を組んだ作品「にらめっこ」、アルミ板で作った「舞」・「聴く」、鉄の「憧」と今製作中の鉄の第二作。何と言葉で説明するよりも、ここに写真をのせられないのが残念です。作品は、自分の知っている私より、より雄弁に私を物語るらしいです。生の花は本当に美しく、いけばなを知らなくとも一輪さしてあってもその場の空気が変わります。しかし、アルミや鉄が美しいと、主観的にも客観的にも感じられる作品になるには本当に大変な苦しみです。

現在月に一度、家元勅使 河原蒼風先生に教えていただきます。家元は私の名前も御存知ない筈ですが、そのお稽古で賞められると有頂天になる位うれしく、御注意を受けるといつまでも悲しいです。その時集る全国からの生徒達の真剣さ、又家元の何気ない話に、泉が枯れない元気を得ます。もしかするとこれは自慢話になってしまいますが、一昨年秋、父の病氣中に、回復の見通しがつき、やっとおはながいけられる心になった時、そして父さえ生きていればあとは不足は言いまいという時